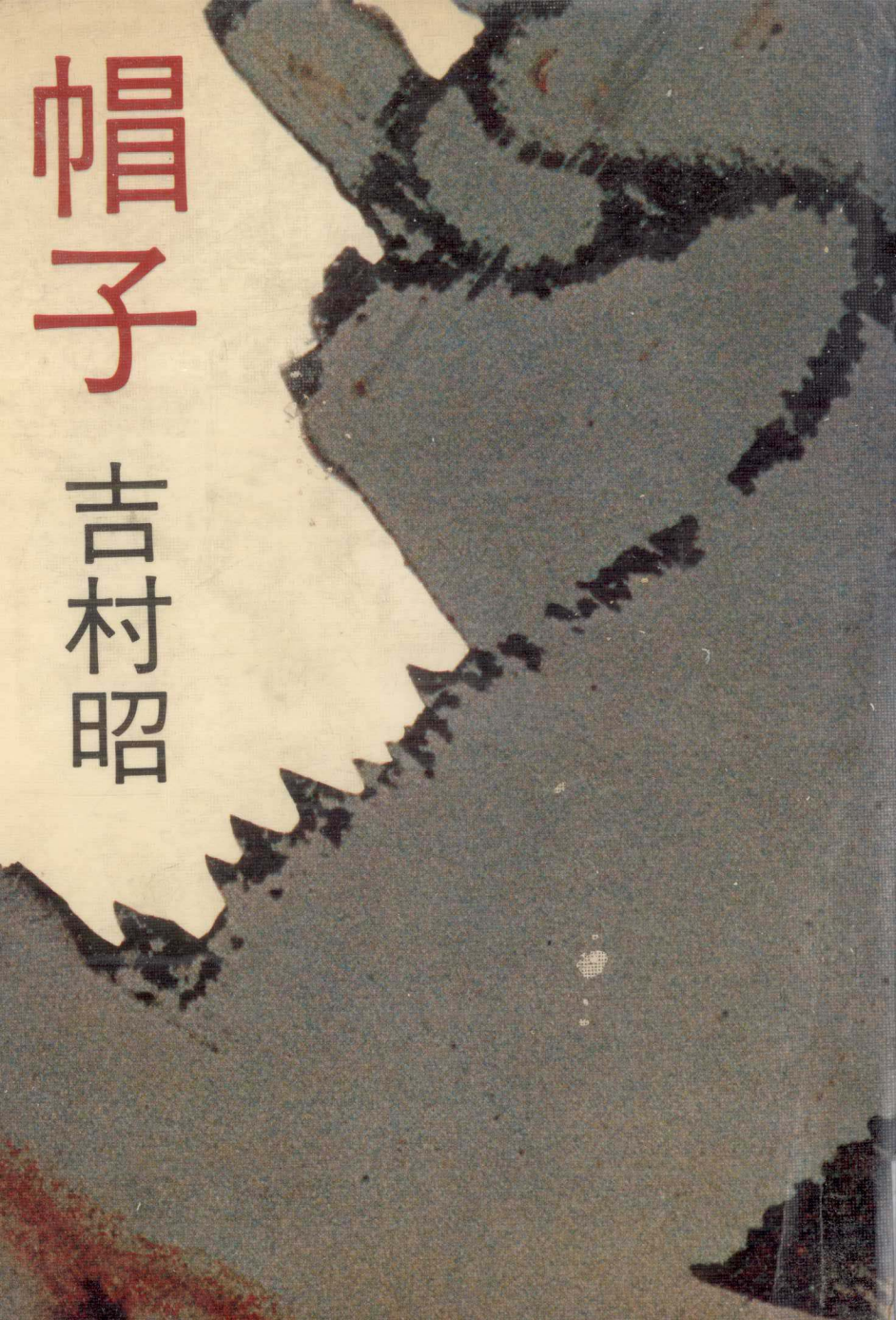


帽子

吉村昭



帽子



吉村昭

帽子

一九七八年八月二六日 初版印刷
一九七八年九月一〇日 初版発行

定価 七八〇円

著者 吉村 昭

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五―二〇
郵便番号 一〇一

電話 出版部 二三〇―六三六一
販売部 二三八―二七八一

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたしません。

目 次

帽子

七

買い物籠

二九

牛乳

五七

踏切

七七

朝食

九七

歩道橋

一一五

奇妙な旅

一三五

雪の日

一五七

黒いリボン

一七七

あとがき

一九九

装丁写真 秋山庄太郎

帽子

帽子

階段をのぼると、久岡は、白いドアにとりつけられた金色のノブをまわした。

明るい店内に客はなく、店の奥に坐っていた中年の経営者らしい女が立ち上ると、口もとをゆるめて近づいてきた。豊満な体をした背の高い女で、耳に円型の赤い大きなイヤリングをつけている。

一カ月ほど前、かれが初めてドアを押した時、女は客と応対しながら視線をかれに向けた。その顔には愛想のよい微笑がただよっていたが、眼に警戒の色がうかび出ていた。店の性格上、客は女性にかぎられ、男が一人で入ってきたことに不審をいだいたにちがひなかった。

その時から現在まで、かれは店に五度来てその都度買い物をした。かれが単なる客にすぎぬことを

知っている女の眼には、警戒の色は消えていたが、男が婦人用の帽子を買ってゆくことに對する疑念は残っているようだった。

久岡は、七、八坪の広さをもつ店内を見まわした。見なれた帽子は姿を消していて、新しい色と形をした帽子が壁やショーケースの中に陳列されている。残暑がつづいているが、帽子は早くも秋・冬物にとりかえられている。

かれには、帽子が図鑑でみたクラゲのようにみえることもあれば、美麗な色をした茸類の群のように感じられることもあった。帽子にとりつけられた造花や木の実を眼にすると、洋館の壁に這うブドウ科の蔓を連想したりした。

妻の信子は、かれが帽子を買って帰るとはしゃいで帽子をかぶる。そして、手にとってながめたり、細い指で布をなでたりしているが、二、三日たつとそれにも飽いてしまう。かれが買って帰った五個の帽子は、彼女の氣に入らないのだ。

店の奥のドアがひらいて、十七、八歳の娘が姿をあらわした。

娘は、親しげな笑顔を向けるとかれに近づいてきた。

「また、一つ頼むよ」

かれは、氣さくに声をかけた。

娘は顔が小作りで、頭の大きさが信子とほとんど変らない。娘に帽子をかぶせてみれば、妻の頭に合うかどうかかわかるのだ。

「奥様のお帽子でございますね」

娘は、澄んだ声で言った。

最初、店に来た時、娘は贈物でございますかとたずね、久岡は、

「ぼくに恋人はいないよ。女房の帽子だ」

と、答えたのだ。

「秋・冬物にかえたのだね」

久岡は、壁にかかった帽子に近づきながら言った。

「昨日、一日がかりで陳列がえをしました」

娘は、久岡の傍に歩み寄った。

かれが初めて買った帽子は、ターバンであった。妻が今まで帽子をかぶったことがないと言うと、娘は、帽子というものになじんでいただくためにはターバンがいいのではないかとすすめてくれたのだ。

しかし、信子は、ターバンが気に入らなかった。帽子らしい帽子が欲しいのだ、と不服そうに言った。

それ以後、かれは、帽子を買う度にその名称を娘にメモさせ箱の中に入れて持ち帰った。ベレー、キャスケット、クロッシェの四種であった。

「あれは、なんという帽子かね」

かれは、壁ぎわにあるツバの広い帽子を指さした。それは濃紺の布地の帽子で、茶色い葉と大粒の葡萄のような実の造花がついている。

「キャップリンでございます。おとりしましょうか」

娘の言葉に、かれはうなずいた。

信子には大胆すぎるデザインのように思えたが、彼女の口にする帽子らしい帽子とはこのようなものかも知れぬ、と思った。

差し出された帽子を、かれはながめまわし、造花に指先をふれてみた。

「かぶってみてくれないか」

かれが言うと、娘はショーケースの上におかれた楕円形の鏡に向って帽子をかぶり、ツバを整えた。その取り澄ました顔には売子の表情は消え、かれの存在も忘れた陶醉した娘らしい色がかび出ていた。

娘が、彼に顔を向けた。

かれは、帽子の下に妻の顔を思い描いた。娘の肌は健康的で張りがあるが、妻の皮膚は青白く艶が失われている。鼻も頤も頬の骨も突き出ていて、深くくぼんだ眼窩の奥に眼が光っている。

「少しゆるいのじゃないかな」

かれは、娘の顔と帽子を見比べながら言った。

「多少そんな感じもございますが、このお帽子は深くつくられていますから、別に風でとぶこともございせん」

娘は、帽子の下からかれに視線を向けながら言った。

風か……、かれは苦笑した。信子は、八力月前から風に身をさらすこともなくなっている。病院と

家を往復する車の中でも、窓は閉めていたし、帽子がとぶような強い風とは無縁になっている。
妻は、帽子を病床に坐ってかぶる。身を横たえて、頭に帽子をのせたまま眠ることもある。

「お色ちがいいのですが……」

経営者らしい中年の女が、傍から口を添え、壁とショーケースの中を指さし、グレー、朱、黒の同型の帽子をしめした。

しかし、かれは濃紺の帽子が妻を喜ばせるように思え、紙幣を娘にさし出した。そして、部屋の隅におかれた椅子に坐ると、煙草に火をつけた。

ふと、かれは、この店にくるのも今日が最後かも知れぬ、と思った。食物は、小さい匙で妻の口に入れてやるが、二十日ほど前から固形物は通らなくなっている。辛うじて液状のものは受けいれるが、それも吐き出すことが多い。連日やってきて注射をしてくれる医師は黙っているが、その顔には死期が間近に迫っていることをしめす表情がうかんでいた。

「奥様思いでいらっしゃいますね。奥様はおしあわせでございますわ」

中年の女が、感嘆するように言った。

かれは、照れ臭そうな眼をして笑った。

娘が包装した箱と釣銭を手近づく、と、

「このお帽子はキャップリンでございます。名前を書きましたメモを箱の中に入れました」と、言った。

かれは、煙草をもみ消すと立ち上り、箱をかかえると女たちに軽く頭をさげ、ドアを押した。

キャップリンか、と、かれはつぶやきながらせまい階段をおりた。

二

かれは、高校を卒業してから新劇の舞台装置の仕事をしていたが、少年時代から興味を持ちはじめた郷土玩具の蒐集につとめ、小さな出版社から児童遊戯具の変遷を書いた書物を出してもらった。それは、わずかな部数の地味な研究書だったが予想外の反響を得て、雑誌その他からの原稿依頼が舞いこむようになり、そのため劇団を退き、原稿執筆に専念するようになっていた。

かれの得る収入は不定であったが、月々の配分を慎重にやりくりすれば、決して豊かではなかったがつつましい生活をするのに不足はない額であった。

三年前、紹介者もなく一人の娘がかれの小さな家に訪れてきた。かれの著書に刺戟をうけ、玩具史の研究をはじめているという。その娘が、信子であった。

信子は、同じ愛好者の女友達を連れたりしてしばやってくるようになったが、かれの生活に強い関心をしめしはじめた。

彼女は、かれが三十坪の借地に建てられた十二坪の家を、大工の手も借りず一人で建てたことに驚いたようだった。舞台装置の仕事を十年以上もつづけていたかれとしては、決して不思議なことではなかったが、一戸の家を作り上げた根気と技術に感嘆したのだ。

さらに信子は、かれが食糧を或る程度自給自足していることにも興味をいだいた。かれは、近くの